昭和六十三年十二月二十八日第三種郵便物認可
令和八年一月一日発行（毎月一回一日発行）第四五四号

俳句

一　月　号

花鳥諷詠　　1月号（454号）　日本伝統俳句協会

花鳥諷詠®

令和８年１月■第454号 ――― 目 次

年頭のご挨拶 …… 井上　泰至 …… 2

花鳥諷詠選集 …… 今井　肖子 …… 5
戸田　祐一 …… 7

一頁の鑑賞 …… 藤森　荘吉 ……10
渡辺　　檀 ……11

この人の作品 …… 杉原　祐之 ……12

鎌倉だより

鎌倉の虚子をたずねて －その一－ …… 長谷川槙子 ……13

特別インタビュー
山田閏子氏に聞く

深見けん二の世界（１）…… 井上　泰至 ……14

『虚子俳話録』研究 （1）……19

虚子名品館

虚子の素顔　―句集冊子と子規宛虚子書簡 …… 藻井　紫香 ……22

卯浪 ……24

風報 ……25

地区行事開催日程表 ……31

編集後記 ……32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙　川端龍子「桑港」（「ホトトギス」大正２年７月号）

花鳥諷詠選集

●今井肖子 選

特選五句

蜻蛉の影の早さを風の追ふ　高松　岩瀬　由美子

満月を仰ぎその辺まで歩く　十日町　小川　則子

白萩の揺れやまざればなほ白く　高松　浅野　クニ子

ちぐはぐな会話の続く夜長かな　江津　安田　心道

秋日和大工の口に次の釘　福岡　福田　ひろし

二句短評

一句目――風に乗って行き交う蜻蛉ですが、晴れた日は蜻蛉そのものより黒く濃い影がつつーと目立つことも。目に見えない風が木の葉や土埃で見え、足元の地面の動きのある景が表現されています。

二句目――月の句は多くあり、同じ月を観ていたのだという一体感をあらためて感じました。この句は、そういえば今夜は、と仰ぎ見て、いい月だな、とちょっとその辺まで歩いたという何気なさが良い味を醸しています。

入選六十句

新涼てふ透明感に出合ひたる　糸島　小河美紗子

神の田の糸目真白き鳥威　松原　加藤　あや

電線の雪がぽたりと盆の窪　大津　王仁　曄文

先生も子らも手に手にねこじやらし　今治　横田青天子

司令塔一羽ゐるらし稲雀　前橋　新木ひろみ

今年酒つなぐ魂能登にあり　石川　白根　寿子

露けしや星より暗き山家の灯　東京　庄嶋　里子

静けさを敷き詰めて海秋日和　高松　肥塚　英子

古書店の小さき扉や秋灯　大分　峯戸松祥子

一瞬の風に穂を解く野の芒　福知山　松山　牧子

けふといふ幸せ今日の月仰ぐ　宇佐　尾崎　陽子

秋晴や霊峰纏ふ雲一つ　加賀　正藤　宗郎

過疎の村過密に熟るる柿の秋　大分　橋本　照子

思ひ切り手紙を捨てて秋思解く　白山　中川外代子

新米の元気に跳ねる精米機　鳥取　和田田鶴子

日の一寺陰の一宮穂絮飛ぶ　天理　松田　吉上

曼珠沙華からまりさうで絡まらず　藤岡　飯塚　柚花

地下室の裸電球蚯蚓鳴く　熊本　大津　夕可

朝霧を灯して赤きトラクター　帯広　吉岡　簫子

露寒やひとりにともす一人の灯　横浜　永澤　功

椅子寄せて少し酌み合ふ小望月　熊本　西村　孝子

鯉泳ぐ水美しく秋に入る　島原　園田　正栄

雨音の残暑を消してゆく夜更　伊賀　子日　康子

み吉野の月の雫に少し濡れ　西宮　柄川　武子

ばつた飛ぶ小さな風をおこしつつ　羽生　樋口レイ子

伏す母に灯りほのかや十三夜　金沢　金谷　優子

新米の一粒づつの光研ぐ　西宮　山之口倫子

色鳥の遠くより来てすぐ遊ぶ　長岡　榎本清津子

遺されし一書に偲ぶ萩の雨　熊本　山本　淑子

亡き犬の小屋にふらりと秋の蝶　うきは　大力　妙子

朝日もう眩し過ぎたるゑのこ草　大阪　小玉ヒロ子

雲間より出づる名月二三分　金沢　岸本佐紀子

蜻蛉の風になりきる時のあり　うきは　中川　寿朗

倒伏の稲田に農夫佇める　高山　原田　尚子

旅終へて我家の虫の音に帰る　袋井　湖東　紀子

行くあての無き音色して昼の虫　福岡　大石　靖子

かくれんぼ鬼の子に降る木の実かな　鹿児島　角屋敷昭子

野に還る二の丸跡やゑのこ草　香川　三宅久美子

観月の一人の夜を寝惜しみて　久留米　谷川　章子

外灯に小雨の透けてうそ寒し　静岡　杉田　和子

移ろひは秋の雲より始まりぬ　福岡　井上　京子

三体の地蔵にみかん一個づつ　福岡　古賀　博子

おごそかな祝詞とべつに鳴る添水　吹田　北上美佐子

潮風に秋の気配の寄せて引く　熊本　武藤　たみ

かまきりの音を持たざる威嚇かな　八代　山下さと子

月今宵共に仰ぎし日の遠く　大牟田　鹿子生憲二

仕置場に遠く神輿の太鼓かな　朝来　佐竹美保子

石組の奥点しをり曼珠沙華　倉敷　田口ひさえ

待宵の風に吹かれて橋の上　鹿児島　坂本　啓子

投函に歩く千歩や月今宵　宮若　菅井久美子

まだ熱き窯を開きて秋立つ日　松原　吉村美穂子

奉納の能面の影秋深む　大牟田　藤好　信子

十六夜や盛り塩光る路地の奥　東京　大原　栄子

初鴨の尾に青を置く光かな　神戸　谷本　正行

半分は虫鬼灯となつてをり　東京　今井　名津

仕舞風呂シャボンに溶ける秋思かな　福岡　井上波津子

晴天に音響かせて稲を刈る　筑紫野　多田　蒼生

人寄らぬ句碑の台座に櫟の実　北海道　金谷　郁子

仰ぎてはまたひとつまみ月見豆　神戸　田中　由子

とびとびに灯る裏窓月を歩す　鹿児島　蓑輪ムツ子

●戸田祐一選

特選五句

斧あげぬ蟷螂の目と語り合ふ　島根　猪俣　北洞

見渡せば奢る色なき花野かな　加古川　岩城　久美

君もまた胸に住む人星月夜　宇佐　磯永　喜八郎

頂の尖りて峰の夕焼かな　鹿児島　真辺　紅舟

初霜や路地にきらめく朝日踏む　米子　前田　千

二句短評

一句目――蟷螂の斧といえば儚い抵抗の例えだが、この句の蟷螂は抵抗の気迫がないのか、静かに葉の上に止まって、大きな目で周りを見ている。思わず、「何を考えているの」と声をかけた。面白い存問だと思う。

二句目――秋の七草は地味なものが多く、花野とはいえ目立つ色の花は少ない。しかし、この花野はいわば素顔の少女のような、すがすがしさで人々を引き付ける。

入選六十句

冬ぬくし空の蒼さにあるゆとり　島根　服部　康人
先生も子らも手に手にねこじやらし　今治　横田青天子
忘れゐし彩にも出会ふ花野かな　福岡　馬場　紀子
暫くは構へを解かずいぼむしり　高山　大下　雅子
閨の月母の介護のまだ解けず　郡山　濵名　伸子
百歳の謝辞矍鑠と敬老日　鳥取　砂流　育子
虚も実もなき秋天の深さかな　大野城　阿比留初見
捨てられぬ思ひで多し秋日傘　上越　橋詰シズエ
啄木鳥や姿見せねどこの辺り　周南　河村よし子
休憩の長き一人の秋遍路　阿南　谷川　宗和
夕影に椋鳥の群うねりゆく　仙台　成田　晃子
ちらほらがだんだん束に稗を抜く　宇部　鈴川　礼子
様様なドラマの余韻秋の浜　金沢　村本寿美枝
思ひ切り手紙を捨てて秋思解く　白山　中川外代子
廃鉱の大煙突や月今宵　熊本　今福　公明

卒寿とは誰も気付かず踊笠　糸島　春田美智子
誰彼に笑まひ礼言ふ生身魂　箕面　須知香代子
朝寒や肌着にタグの付きしまま　南砺　有川　寛
虫の声無人駅舎を繋ぎゆく　伊賀　前出美千子
秋日傘触れ合ふ墓の小道かな　鹿児島　平山　洋子
列車発つ三時の秋の日を入れて　久留米　吉田いずみ
秋蝶のふと通り過ぐ日暮かな　垂水　山元　通章
朝霧を灯して赤きトラクター　帯広　吉岡　簫子
柿一つ先に来てゐる句会かな　大牟田　介弘　紀子
太刀魚の跳ねて波ごと釣り上げし　大阪　ふじもと言果
硯海の水面しづもる十三夜　大阪　上西左大信
繋ぎたる子の手冷たし十三夜　高松　久本　照代
椅子寄せて少し酌み合ふ小望月　熊本　西村　孝子
笹がきの大き過ぎたる牛蒡飯　柳川　井手　友子
祈る夫後ろ姿の爽やかに　神戸　平尾　孝子

小春日やテラス席から埋まるカフェ　福岡　服部　朝子

秋耕の畝の仕上げの柄振かな　和歌山　市ノ瀬翔子

手を繋ぐ母の歩巾や後の月　稲城　藤田惠美子

共通のあるある話敬老日　神戸　大西芙紗子

道草の子供のごとく歩す花野　神戸　齊木　富子

触れさうに頭上渦巻く群蜻蛉　高松　池田　裕子

秋晴や割りし卵に黄身ふたつ　下関　中村　元代

梨を捥ぐ甘さの重みどつしりと　稲城　佐藤以勢子

遠くへはゆかぬ秋蝶見失ふ　高松　福江　昌子

補聴器の耳に水澄む流れかな　十日町　小川のぶこ

旅終へて我家の虫の音に帰る　袋井　湖東　紀子

赤とんぼ自在に群れて触れ合はず　西宮　山谷　彰子

沖の船つるべ落しの日に染むる　尾鷲　若林　柾矢

ふいと出てふいと消えたる菌かな　高知　大川　房子

子の走る前へ前へとばつた跳ぶ　徳島　吉田　有子

秋日和大工の口に次の釘　福岡　福田ひろし

散り敷きてなほ香を止め金木犀　米子　中村　襄介

それからのことが聞きたく夜鷹蕎麦　東京　早坂　洋子

走り根の階に聞く虫の声　鹿児島　西村　セツ

かまきりの音を持たざる威嚇かな　八代　山下さと子

カーテンのひだに畳める秋思かな　東京　関　千恵子

枯れ急ぐ芒眺めて峠越ゆ　鹿児島　松下　正拳

秋晴を招き入れたる大玻璃戸　奈良　河村久美子

朝露の粒一面に光る土手　金沢　宮村　啓子

燕帰る丹精の巣はそのままに　水戸　山口　諺水

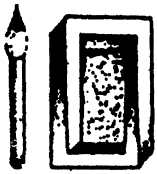
秋声やキリンの睫毛重たげに　名古屋　壁谷てる子

公園のライブ待ちたる秋日傘　高槻　髙杢　亮太

仕舞風呂シャボンに溶ける秋思かな　福岡　井上波津子

帰り来てドアの中にもある夜寒　東京　篠崎　千春

ゆるがせにできぬ返信秋の夜　鳥取　宮脇　典子



編集後記

元日や午後のよき日が西窓に　虚子

最晩年の句である。「に」止めの柔らかい余韻から、生あることの感謝の念も伝わってくる。同じ時期の句には、推敲を重ねたり、初夢を見たり、おでんをつついたり、初空を仰いだりして様々あるが、この何気ない日常の幸せを詠んだ、一見すると変哲のない句が実は大切だと思う。過去や未来にとらわれず、一瞬一瞬を大切に生きる心こそ、俳句の心にふさわしい。

●旧年中は、本誌に様々のご尽力・ご理解を賜り、誠に有難う御座いました。会員の皆様を繋ぎ、伝統俳句の更新と浸透に資する初心を忘れず、進んで参る所存です。本年もご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

●「『虚子俳話録』研究」は、実作を意識した虚子研究、「虚子名品館」は、虚子の書から俳句に迫る研究で、新しい切り口です。「鎌倉だより」は、九月の全国大会を意識した、鎌倉案内で保存版です。

●元ＮＨＫディレクターの蜂谷初人氏の発案により、俳句の映像化の試みを語り合う場を設けました。俳句は一瞬の時間を詠みもしますが、折り重なる時間も詠むことができます。俳句から映像化できること、できないことを知ることは、俳句を詠むことにも大いに参考になります。お申込みは1月10日9時から、芭蕉記念館まで。

●十一月号に誤記がございました。記して修正し、お詫び申し上げます。十三頁上段本文八行目、下段本文十三行目ともに　揚句→掲句（井上泰至）

●花鳥諷詠選選者予定

掲載	締切り	選者	
4月号	1月20日	井上泰至	小川みゆき
5月号	2月20日	今井肖子	西村正一郎
6月号	3月20日	井上泰至	伴　明子
7月号	4月20日	今井肖子	酒井湧水

花鳥諷詠　一月号（通巻第四五四号）

定価一、二〇〇円　但し、本代は年会費に含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和八年一月一日

発行人　井　上　泰　至

発行所　**公益社団法人**
日本伝統俳句協会

〒151-0073
東京都渋谷区笹塚二-一八-九
シャンブル笹塚二-B一〇一

電　話　〇三-三四五四-五一九一
ＦＡＸ　〇三-三四五四-五一九二
定休日　水・土・日・祝

郵便振替　口座番号　〇〇一六〇-七-一八六八二〇

印刷所　日本ハイコム㈱
〒112-0014　東京都文京区関口一-一九-二